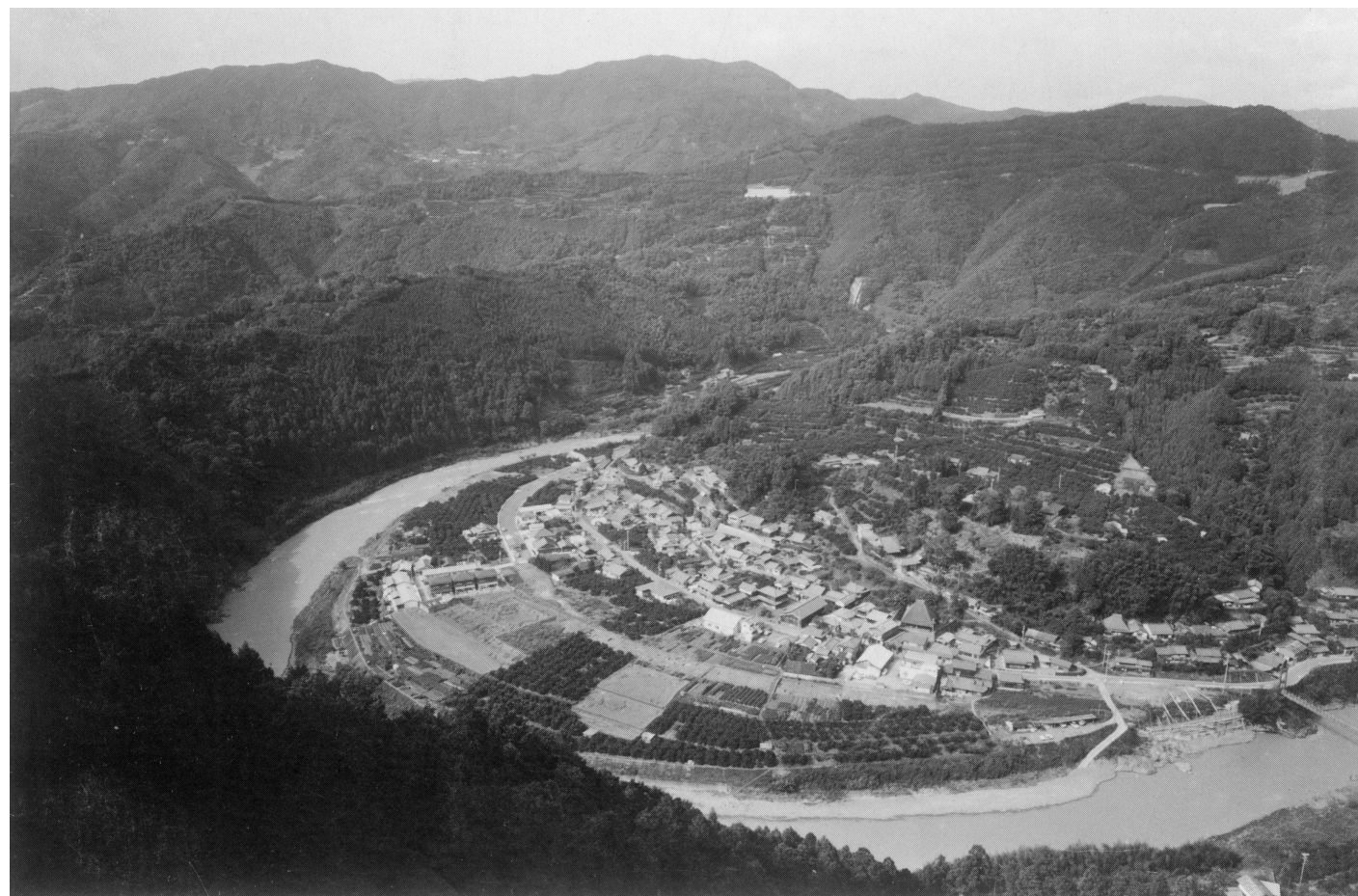


有田郡清水町

粟 生 遺 跡

県道有田・高野線道路改良工事に伴う
第4次発掘調査概報



1989. 3

財団法人 和歌山県文化財センター

序

有田郡清水町は有田川沿いにあって、周囲を緑に囲まれた閑静で景勝の地があります。また古くから高野往還路が開かれ、貴重な建物や民俗芸能が伝承されていることでもよく知られております。

この度、同町粟生地内に所在します粟生遺跡の発掘調査を実施しました。この調査は、県道有田・高野線道路改良工事に伴うもので、本年度が第4次にあたります。

調査の結果、縄文時代早期から晩期に及ぶ土器や中世の土坑、近世の掘立柱建物・井戸・木棺墓等を発見しました。

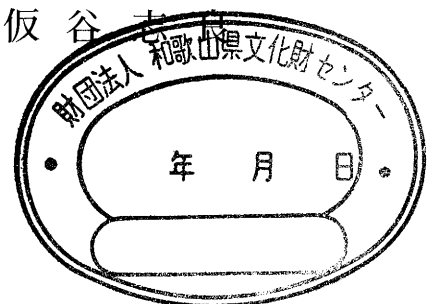
ここに発掘調査の概要報告書を刊行します。本書が県民の皆様のみならず、研究者の方々の御参考になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり、御協力をいただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げるとともに、今後なお一層の御指導・御鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます次第です。

平成元年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 仮谷 七 郎



目 次

I 序 章	頁
1 調査の経緯	1
2 位置と環境	1
II 遺 跡	
1 調 査	3
2 遺 構	3
III 遺 物	
1 縄文土器	5
2 中世の土器	5
3 近世の遺物	6
IV ま と め	8

図 版

図版 1 遺跡	1 遺跡遠景	図版 7 遺跡	1 埋桶土坑SK16
	2 調査地遠景		2 同 上 SK17
図版 2 遺跡	1 I区全景		3 埋桶土坑SK18・19
	2 J区全景		4 同 上 SK22
図版 3 遺跡	1 K区全景	図版 8 遺跡	1 木棺墓SX04
	2 同 上		2 同 上 遺物出土状況
図版 4 遺跡	1 L区全景		3 土坑墓SX05
	2 同 上	図版 9 遺物	縄文土器・中世土器
図版 5 遺跡	1 M区全景		近世陶器
	2 同 上	図版10 遺物	近世磁器
図版 6 遺跡	1 井戸SE01・土坑SK24	図版11 遺物	近世陶磁器
	2 井戸SE01	図版12 遺物	軒平瓦・SX04出土金属製品
	3 土坑SK20		砥石・長方硯

挿 図

	頁
第1図 栗生遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	iv
第2図 葛籠遺跡出土石棒実測図	1
第3図 宝谷遺跡出土土器実測図	1
第4図 発掘区位置図	2
第5図 SE 01実測図	3
第6図 SK 16実測図	4
第7図 SX 04実測図	4
第8図 遺構配置図	4・5
第9図 縄文土器実測図	5
第10図 中世土器実測図	6
第11図 近世陶磁器実測図	7

例 言

- 1 本書は、有田郡清水町栗生に所在する栗生遺跡の第4次発掘調査概要である。
- 2 この調査は、県道有田・高野線道路改良工事に伴う事前調査である。調査期間は1988年6月13日から1989年3月30日までで、調査面積は約1,300㎡である。
- 3 発掘調査は、和歌山県教育委員会の指導のもとに財団法人和歌山県文化財センターが実施した。調査の組織は以下の通りである。

和歌山県教育委員会

財団法人和歌山県文化財センター

文化財課 課 長	梅村善行	事務局 局 長	梅村善行
副課長	福田資弘	次 長	菅原正明
主 幹	高橋 彬	埋蔵文化財課々長	辻林 浩
文化技術班々長	吉田宣夫	管理課長	松田正昭
〃 主任	藤井保夫	埋蔵文化財課主査	山本高照

- 4 現地調査は山本が担当した。調査中、清水町文化財保護審議委員長前嶋高蔵・同町教育委員会今井敏郎両氏より援助を得た。
- 5 本書の執筆・編集は山本が担当した。執筆にあたり、県立紀伊風土記の丘管理事務所中村貞史・松下彰、文化財センター鳴海祥博・村田弘の各氏から教示を得た。
- 6 本書に掲示した実測図の方位はすべて磁北である。当地方の磁針方位は1979年現在で、西に約6度10分偏している。

第1図 栗生遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

I 序 章

1 調査の経緯

清水町栗生地内において、和歌山県土木部が県道有田・高野線道路改良工事を計画した。ところが工事予定地には1953年の大水害時に発見された縄文時代の栗生遺跡が存在することから、和歌山県教育委員会は昭和60・61年度に、事業の一部を社団法人和歌山県文化財研究会に委託のうえ、遺構・遺物の有無を確認する調査を実施した。昭和62年度の第3次調査は、第1・2次調査において遺構が確認された範囲について行われ、併せて第1・2次調査において未確認だった部分の試掘調査も実施された。本年度の第4次調査は、この試掘調査の結果を受けて行われたものである。

2 位置と環境 (図版1, 第1～3図)

高野山に源を持つ有田川は、伊都郡花園村、有田郡清水町・金屋町・吉備町を貫きながら流下し、有田市箕島において紀伊水道に注ぐ。

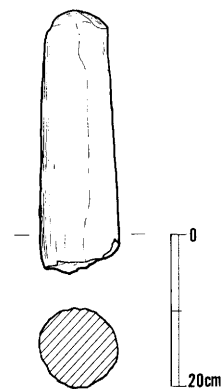
清水町栗生地内に所在する栗生遺跡は、この有田川の右岸に形成された河岸段丘上に立地している。河口から遺跡までの直線距離はおよそ20kmだが、実際に箕島から車で遺跡に向かう場合、道は有田川沿いに曲折を繰り返しているので、小1時間はかかる。

遺跡付近の標高は約115m。川との比高差はおよそ10mある。遺跡の背後は丘陵とも呼べる比較的なだらかな地形で、前面は有田川を隔てて急峻な山が屏風のごとく立ちはだかり、視界は利かない。山は遺跡の西に当るので、遺跡付近の日没は早い。

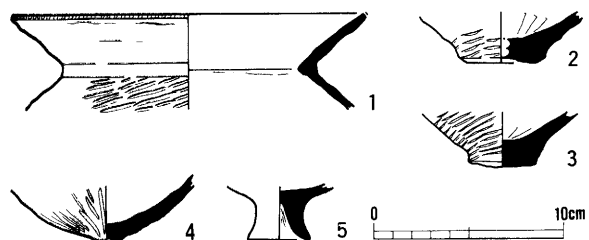
周辺の縄文遺跡には、少し下流に岩野河遺跡があり、中期の土器が発見されている。また、かなり川を遡った町役場所在地付近に、西原・清水・葛籠の各遺跡が存在する。葛籠遺跡からは結晶片岩で作られた石棒が出土している。

室谷遺跡は有田川に流れこむ三瀬川谷川沿いの山の斜面にあり、弥生時代終末頃の土器が発見されている。有田川の最も上流に位置する弥生時代の遺跡である¹⁾。

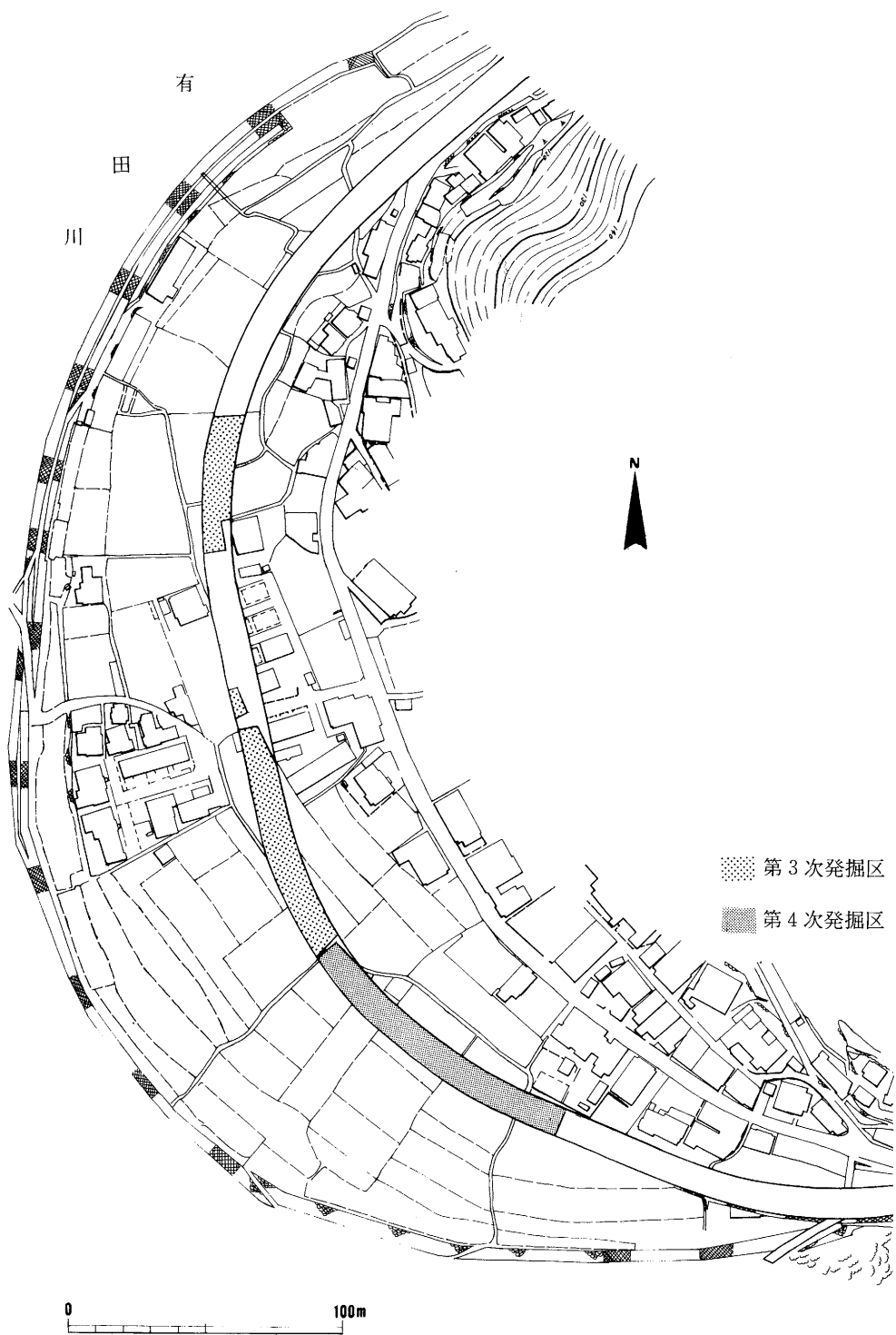
中世の遺跡では、阿瀬川城跡や天城跡がある。また栗生遺跡の東側山麓には、応永34年(1427)銘の再建棟札を持つ栗生薬師堂が存在する。



第2図 葛籠遺跡
出土石棒実測図 1/10



第3図 室谷遺跡出土土器実測図 1/4



第4図 発掘区位置図 1/2,500

Ⅱ 遺 跡

1 調 査 (第4図)

調査地は第3次発掘区の南東側の水田・畑地で、地表面の標高は約 116mある。発掘区は幅11m、長さ 120mあり、調査の便宜上、畦畔をもとに西から東へ I～M区に分割した。

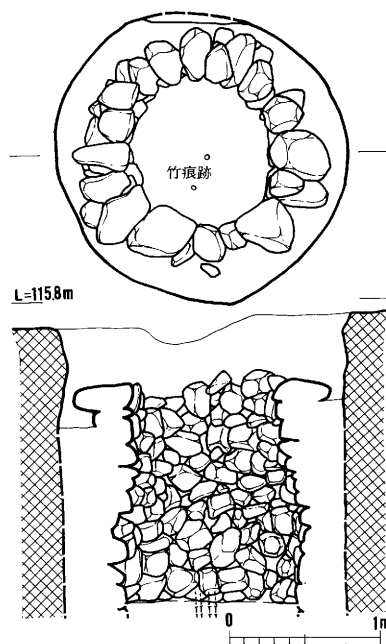
基本層序は、上から耕作土（厚さ15cm）、床土（2～5 cm）、地山の順で、I・K区の南半部にのみ、中・近世土器を包含する暗茶褐色土（3～6 cm）が見られた。地山は黄褐色土ないし茶褐色砂質土で、部分的に径 5～30cm程の河原石が含まれている。遺構はすべて地山面において検出された。

2 遺 構 (図版 2～8, 第5～8図)

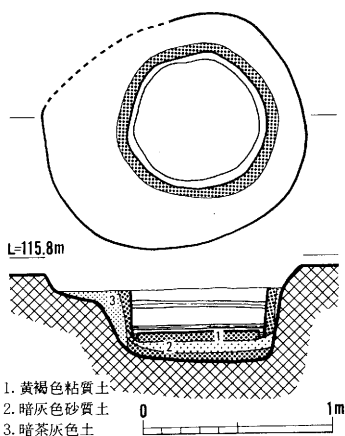
検出した遺構には、掘立柱建物、井戸、土坑、木棺墓、水田、溝がある。これらの遺構の所属時期は中世と近世に分けられるので、この順序で記述する。

中世の遺構 掘立柱建物と土坑がある。遺構は I・J 区に集中し、東へ行くに従い稀薄になる。SB01は I 区にある東西2間の掘立柱建物で、柱間は2.5m等間である。柱掘方は径20～30 cmの楕円形で、深さが15～30cmある。J 区にあるSK03は、東西4.7m、南北3.7～4.0m、深さ0.3mの土坑で、暗茶褐色の埋土中に瓦器・土師器片等が含まれている。SK02・04～09は I・J 区、K区西端にある平面が円形を呈する土坑である。径はいずれも 1 m前後で、深さが0.2～0.5m がある。SK04から土師器小皿・鍋が、SK08からは土師器小皿が出土している。これらの土坑は墓の可能性もある。

近世の遺構 掘立柱建物、井戸、土坑、木棺墓、水田、溝がある。掘立柱建物の柱穴は K区と M区に集中して見られるが、建物の規模は不明である。柱穴は、やや楕円形で径20～30cmのものが多く、底に河原石を置くものも見られる。SE01は M区東端にある径約 1 mの石組井戸で、石材には人頭大の河原石が用いられている。掘方は径1.9mの円形を呈す。上面から1.9m掘り下げたところで竹の痕跡を検出した。痕跡は 2個あり、径は4.0cmと4.5cmである。井戸の深さは崩壊の危険があったため確認出来なかった。SK01・14～18・21・22は桶を入れ込んだ土坑である。いずれも桶そのものは残存せず、痕跡が残る。K区中央部にあるSK15は、掘方が東西1.4m、南北



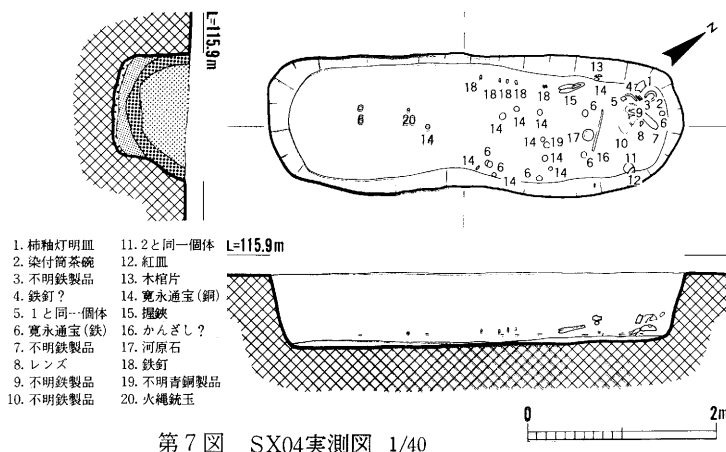
第5図 SE01実測図 1/50



第6図 SK16実測図 1/40

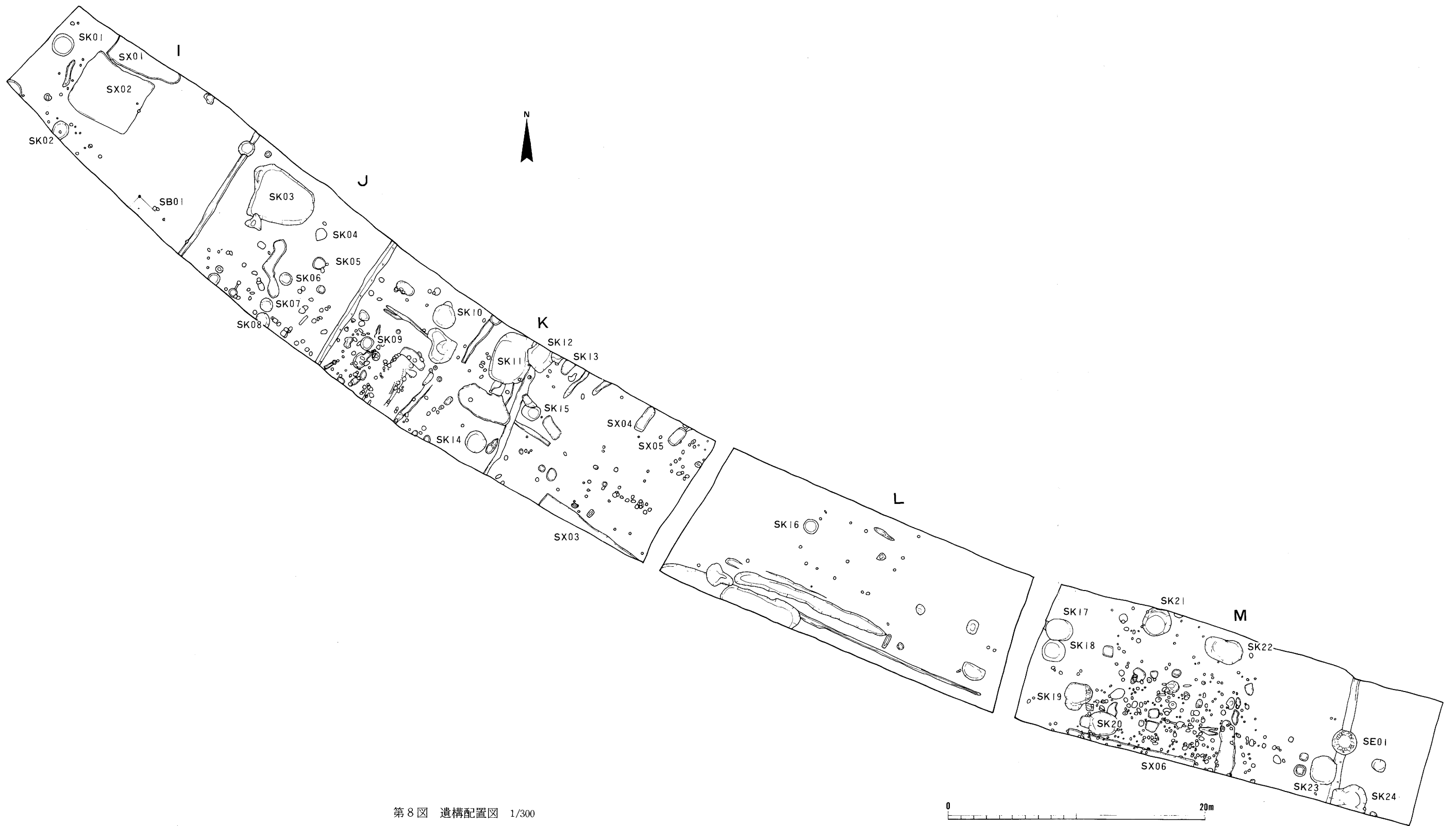
1.2mの偏円形の平面で、深さ0.5mを測る。この掘方の底に、下から黄褐色粘質土（厚さ5cm）、暗灰色砂質土（6cm）、黄褐色粘質土（5cm）を順番に積み上げて敷き、その上に据えられた桶の側板にも5cmの厚さで黄褐色粘質土を巻く。桶の痕跡は径0.73mあり、3条のたがが見られる。埋土中から軒平瓦等が出土している。SK19はM区西端にある東西2.1m、南北1.6m、深さ0.75mの土坑で、東辺壁にのみ、径10～35cmの河原石を積み上げている。SK23はSE01の南に近接する土坑である。平面は一辺が約1mの隅丸方形で、僅かに南北が長い。深さは

0.7mを測る。SE01の付属施設であろう。SX04はK区北東隅にある木棺墓である。掘方は隅丸長方形の平面で、上端で長さ2.2m、幅0.7m、下端で長さ1.95m、幅0.5mある。深さは0.4mあり、底は僅かに南に傾斜している。主軸の方向は磁北に対して37度東に偏している。埋土は上から暗茶褐色土、黄褐色粘質土、暗茶褐色砂質土、暗灰色粘質土（厚さ2～3cm）の順である。このうち黄褐色粘質土は当初、木棺上面を覆っていたものであろう。木棺は腐朽し、わずかに棺材の小片が遺存していたにすぎないが、鉄釘等遺物の出土状況から見て、木棺は掘方いっぱいに据えられていたものと思われる。出土した遺物は、柿釉灯明皿1、染付筒茶碗1、紅皿1、握鉢1、かんざし(?)1、眼鏡のレンズ1、用途不明鉄製品4、同青銅製品1、寛永通宝(銅)17、同(鉄)9、球形の河原石1、火縄銃玉1、木棺片1、鉄釘20である。遺物に靱殻が付着しているものも見られるから、木棺底に靱殻が敷かれていたものと思われる。頭位は遺物の出土状況から北向きであろう。なお、南半部の遺物については原位置を確認出来なかったものもある。SX04の東に隣接するSX05も形状から墓と思われる。隅丸長方形の平面で、長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.2mある。主軸の方位は磁北より45



第7図 SX04実測図 1/40

度東に偏している。遺物は出土しなかった。SX01～03・06は水田である。I区にあるSX02は東西5.3m、南北4.5mの規模で、水田の方向は磁北に対して38度東に偏している。



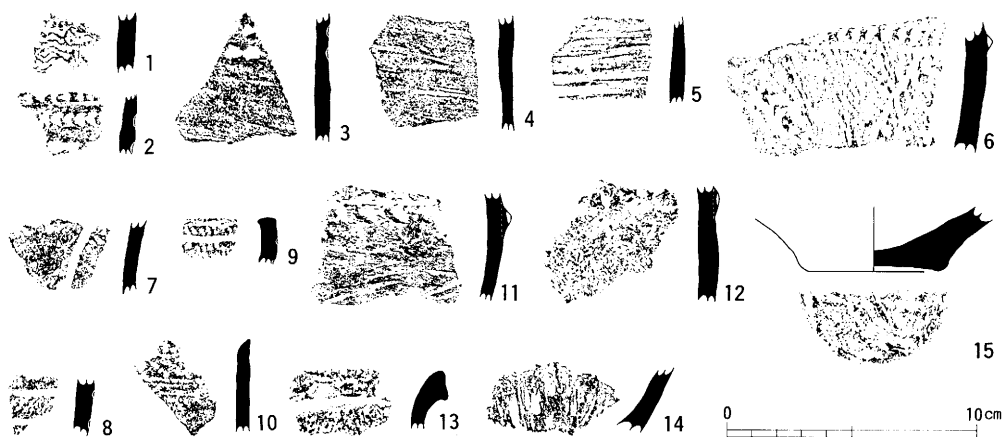
第8図 遺構配置図 1/300

Ⅲ 遺 物

出土した遺物には、縄文土器・サヌカイト剥片、中世の土器、近世陶磁器・瓦・金属製品・石製品がある。このうち近世陶磁器の出土量が最も多い。縄文土器・サヌカイト剥片は、近世の遺構・包含層等から出土したものである。

1 縄文土器（図版9，第9図）

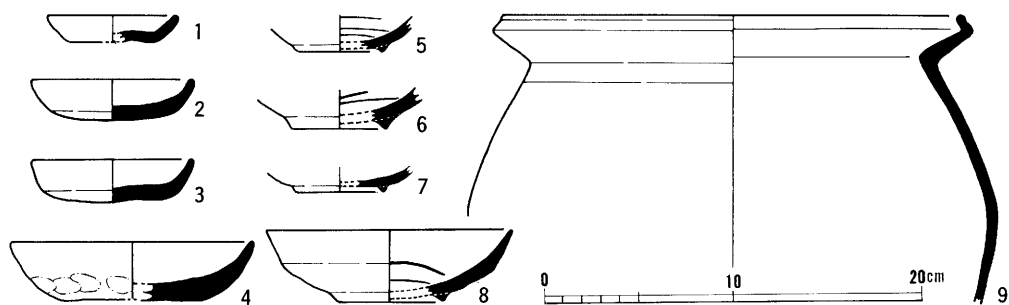
30点の破片が出土した。地区別出土数はI区8、J区11、K区6、L区4、M区1で、東へ行くに従い出土数が少なくなる。土器は早期から晩期に及ぶ。1は山形押型文の早期の土器。器壁の厚さ7mm。2～5は北白川下層I式に属す前期の土器。内外面とも二枚貝による条痕仕上げで、いずれの胎土にも角閃石が含まれる。2の外面にはC字形爪形文、3にはD字形爪形文が施されている。6は地文にかたい繊維の縄文が施された中期の土器。船元式に相当する。7～10は後期の土器。7は磨消縄文で、後期初頭の中津式に相当するものと思われる。8には幅3mmの沈線が2条見られる。9は口縁部の破片。外面に縄文が施され、2条の沈線が見られる。10も口縁部片で、端部は尖る。11～15は晩期の土器。13を除き胎土に結晶片岩が含まれる。11・12は刻目突帯文を持ち、器面調整はケズリによる。13は壺型土器の口縁部。14の外面は下から上へのケズリで、内面に炭化物が付着している。15の底面はケズリによって幾分凹む。



第9図 縄文土器実測図 1/3

2 中世の土器（図版9，第10図）

土器はおもにI・J区の遺構・包含層から出土した。量は少ない。1～3は土師器小皿。口径1，6.7cm。同2・3，8.5cm。4は土師器皿。口径12.6cm。器高3.1cm。5～8は瓦器碗。断面三角形の高台で、内面の磨きは粗い。9は土師器鍋。口径24.1cm。1，J区柱穴。2・9，SK04。3，SK08。4，SK07。5・6，SK03。7，SK02。8，SK09出土。



第10図 中世土器実測図 1/4

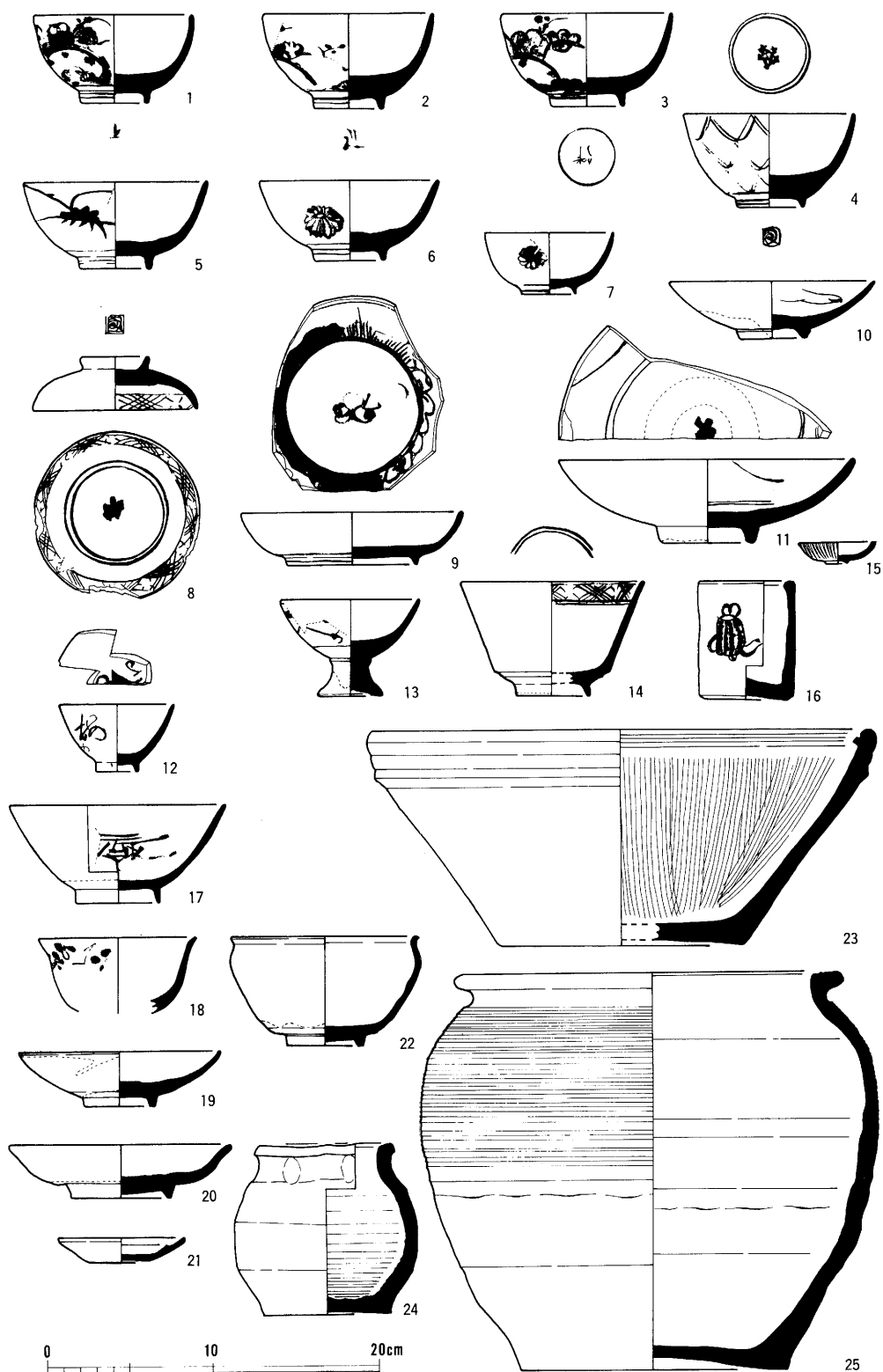
3 近世の遺物

陶磁器 (図版9～12, 第11図) 全区から出土し、18世紀代のものが大半を占める。1～15はすべて伊万里焼である。1～6は所謂くらわんか碗。4は見込にコンニャク印判による五弁花文、高台内に一重方形枠の「渦福」銘が見られる。5・6の見込は蛇の目状に釉を剥ぐ。口径1, 9.4cm。同2, 10.0cm。同3, 10.1cm。同4, 10.1cm。同5, 10.9cm。同6, 10.7cm。器高1, 5.3cm。同2, 5.7cm。同3, 5.6cm。同4, 5.6cm。同5, 5.2cm。同6, 4.8cm。7は小杯。口径7.7cm。器高3.8cm。8は青磁染付の蓋。口径9.8cm。高さ3.2cm。9・10・11は皿。10・11の見込は蛇の目状に釉を剥ぐ。口径9, 13.1cm。同10, 12.2cm。同11, 17.6cm。器高9, 3.2cm。同10, 3.4cm。同11, 5.0cm。12は赤絵の小杯。口径6.8cm。器高4.0cm。13は仏飯碗。口径8.2cm。器高5.8cm。14は青磁染付の碗。口径10.9cm。器高6.9cm。15は紅皿。口径4.7cm。器高1.3cm。16は染付の筒茶碗。外面に宝文を描く。口径5.4cm。器高7.1cm。17～19は唐津焼。17・18は碗。17には透明な飴釉がかけられている。口径17, 12.9cm。同18, 9.4cm。器高17, 5.9cm。19は皿。銅緑釉がかけられている。見込は蛇の目状に釉を剥ぐ。口径12.0cm。器高3.3cm。20は志野焼の皿。白濁釉がかけられている。口径13.2cm。器高3.2cm。21は柿釉灯明皿。口径7.6cm。器高1.5cm。22は瀬戸焼の天目茶碗。口径11.0cm。器高6.6cm。23は播鉢。口径29.8cm。器高12.9cm。24は備前焼の所謂お歯黒壺。口径7.9cm。器高10.2cm。25は丹波焼の甕。口径22.5cm。器高23.8cm。1・4～6・8・10・12・18, SK12。2, SK24。3・19, SK20。7, SK10。9, SK01。13・22, SK10。14, SK11。15・16, SX04。17, SK14。20, SK16。24・25, SK23出土。

瓦 (図版12) K区とM区から出土し、掘立柱建物の柱穴分布状況と一致する。軒平瓦で、平瓦部凸面に「^{よか}□し原 □□ヤ □七」のへう描き文字の見られるものが一点ある。

金属製品 (図版12) 1・3は用途不明鉄製品。2は握鋏。4はかんざしと思われる青銅製品で、全長21.4cm。5は鉛製の火縄銃玉。径1.25cm。重さ10.45g。SX04以外の遺構から出土した金属製品には、寛永通宝の銅・鉄銭、長崎貿易銭の元豊通宝等がある。

石製品 (図版12) 砥石・長方硯がある。2はSK23出土で、全長12.3cm、幅5.2cm。



第11图 近世陶磁器実測図 1/4

IV ま と め

今回の調査によって、中世と近世の遺構を検出し、縄文土器や中・近世の土器・陶磁器等を発見することが出来た。

縄文土器は、中・近世の遺構・包含層等から出土したもので、同時代の遺構は見つからなかった。土器片が発掘区の西寄りに集中している点と、第3次発掘区の北端部、すなわち今回発掘区の西端から北々東におよそ150m離れた位置で、縄文時代後期を中心としたピット群や土坑等を検出していることを併せ考えると、縄文時代の遺跡の中心は、今次発掘区より、もう少し下流側の、第3次発掘区北端部と有田川に挟まれた地点に求めることが出来よう。発見された土器は早期から晩期に及ぶから、縄文時代の全期間、ほとんど絶えることなく人々が粟生の河岸段丘上で生活を営んでいたことが伺える。このことは、狩猟・採集経済に立脚していた人々の生活と、この地の自然環境がよく合致していたことを示している。

弥生・古墳時代の遺物はないが、前回の調査で、弥生後期の土器片と6世紀代の須恵器杯蓋片を各1点発見しているから、両時代においても、この地に人が住んでいたといえる。

中世の遺構には、掘立柱建物と土坑がある。これらは出土した土器から、13～14世紀頃のものである。遺構は発掘区西端部に集中し、東へ行くに従い稀薄になるから、丁度集落のはずれを発掘した可能性が強い。平面が径1m前後の円形を呈する土坑群(SK02・04～09)は、集落のはずれに営まれた墓ではなかろうか。

今回の調査で最も多く見つかったのは、近世の遺構である。出土した遺物から見て、大部分が18世紀代のものである。検出した建物はすべて掘立柱で、2地点に集中している。同時に瓦が出土しているが、掘立柱建物との関係は不明である。石組井戸SE01からは、井戸廃棄儀礼に伴う2個の竹の痕跡を検出した。井戸の傍の土坑SK23は、「井戸尻」と呼ばれる施設であろう²。桶を入れ込んだ土坑は8基発見された。SK15のように非常に丁寧に桶を埋め込んだ例もある。木棺墓SX04からは多くの副葬品が出土した。被葬者はおそらく女性であろう。これによって、当地方における近世後期の墓制の一端を知ることが出来た。

以上、発掘結果を中心に記述した。4ケ年にわたる粟生遺跡の調査も今回で一応終了した。この間、御協力頂いた多くの方々に御礼申し上げるとともに、この調査を契機に清水町の前近代史の解明が一層進展することを念じて筆を擱く。

- 1 1953年の水害時に、水田の畦が崩壊し、清水町二川在住の岡田正策氏によって土器が発見された。当時、山の斜面のかなり高い位置まで水田化されていたが、現在は水田跡に植林がなされている。1986年に岡田氏の案内で、前嶋高蔵・今井敏郎両氏とともに現地を踏査した。その折、崖面に柱穴らしきものが露出しているのを確認している。
- 2 粟生在住の今井悦子氏の教示による。当地方では近年まで、井戸の傍にこのような施設があった。土坑の上に板や竹で足場を作り食器などを洗ったという。また土坑内で鯉を飼うこともあったらしい。



1 遺跡遠景 北から



2 調査地遠景 北西から



1 I区全景 北西から



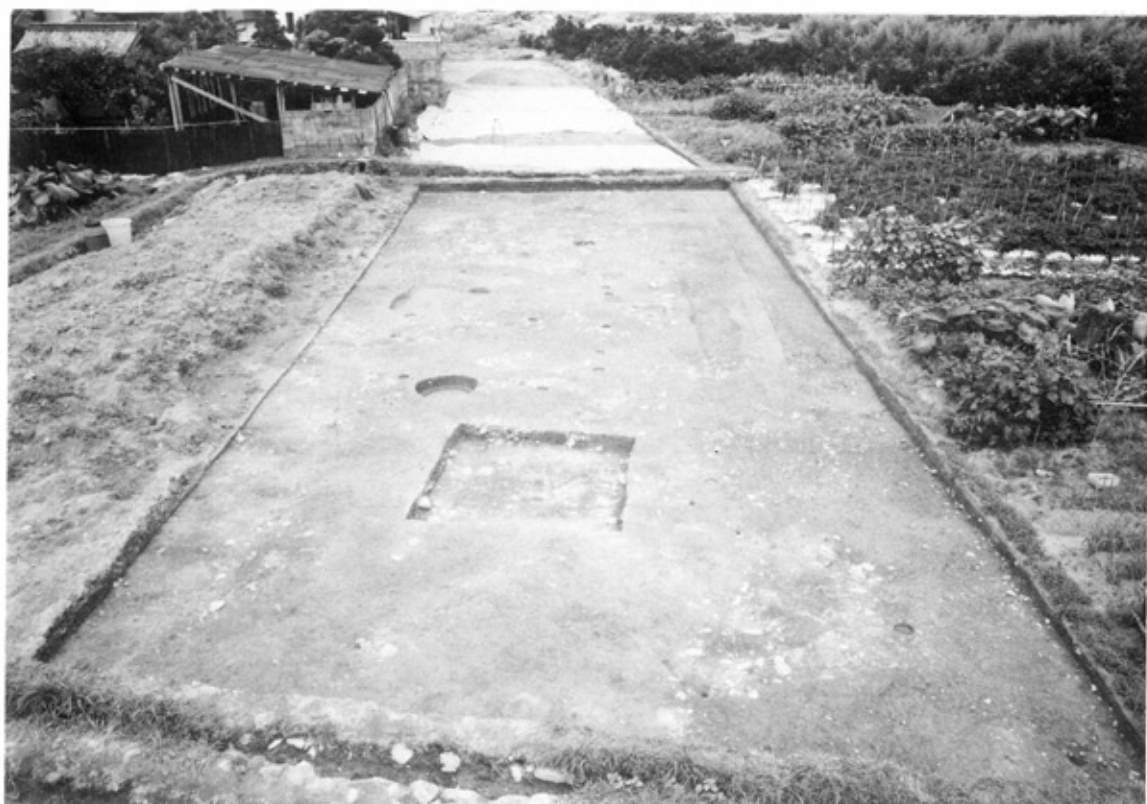
2 J区全景 南東から



1 K区全景 北西から



2 同 上 南東から



1 L区全景 北西から



2 同上 南東から



1 M区全景 北西から



2 同 上 南東から

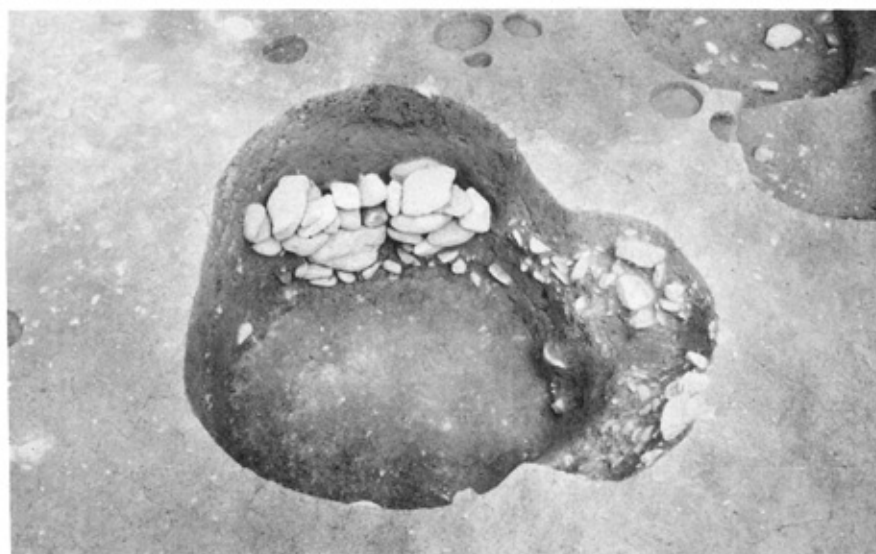
1 井戸SE01・土坑SK24
西から



2 井戸SE01 北から

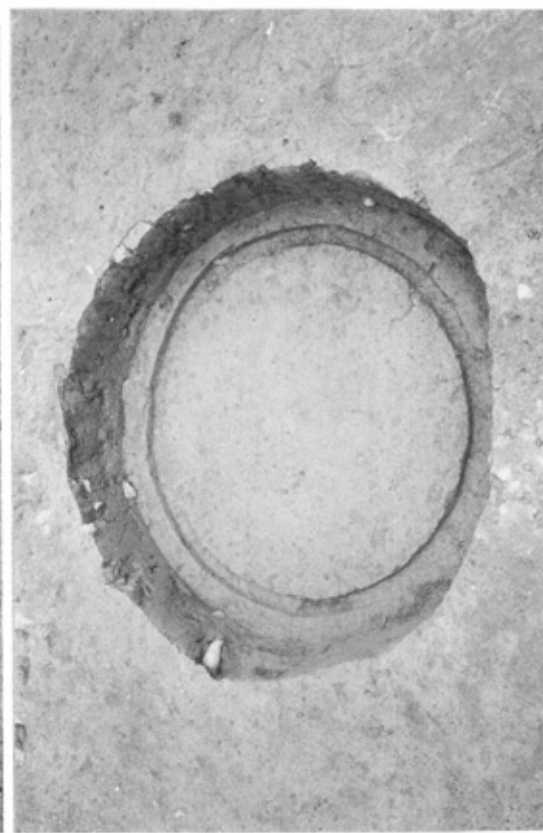


3 土坑SK20 西から





3 埋桶土坑SK18・19 東から
4 同上 SK22 南から



1 埋桶土坑SK16 南西から
2 同上 SK17 南西から



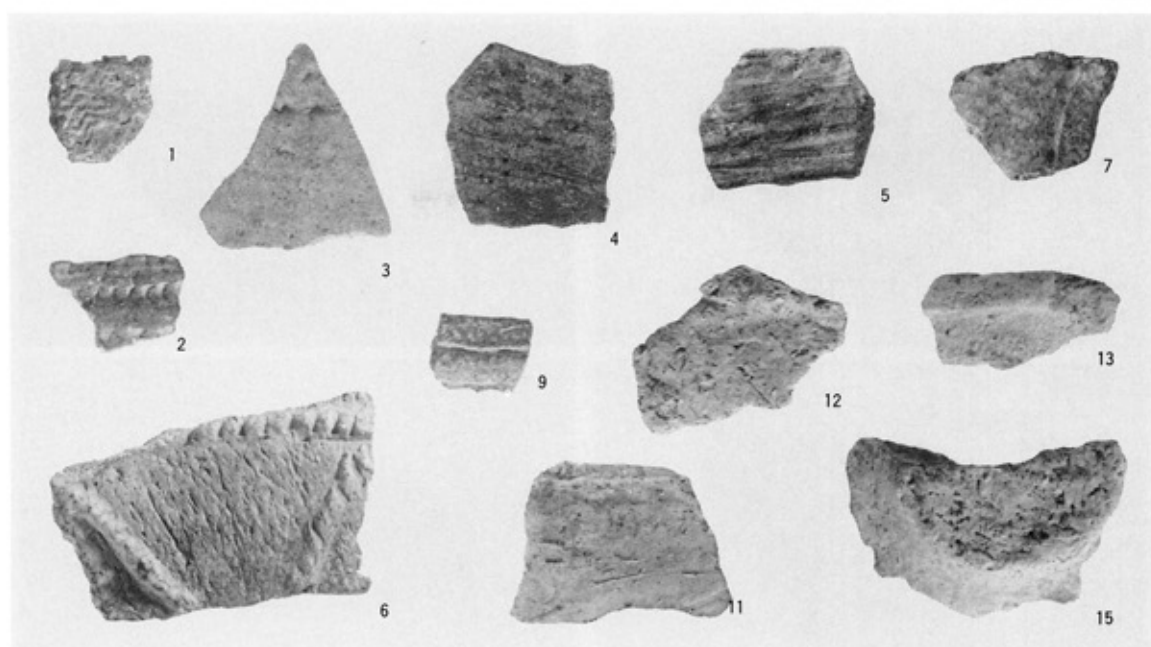
1 木棺墓SX04
南東から



2 同 上 遺物出土状況 南東から



3 土坑墓SX05
北西から



縄文土器 1/2



2



3

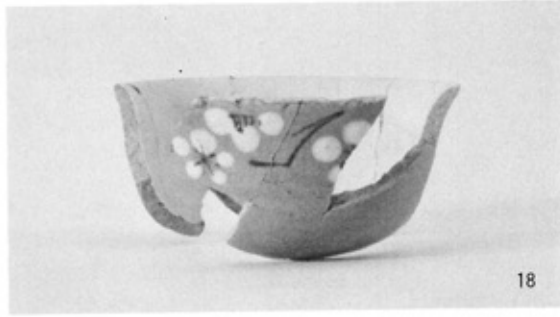


9

中世土器 1/2



17



18



19

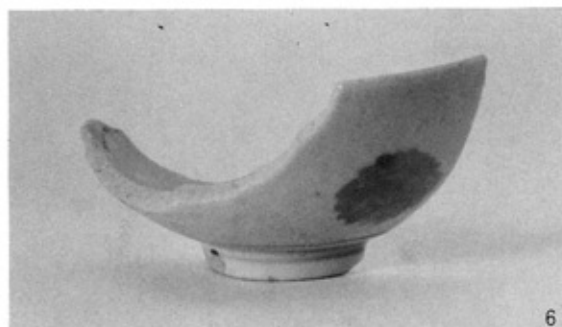


20

近世陶器 1/2



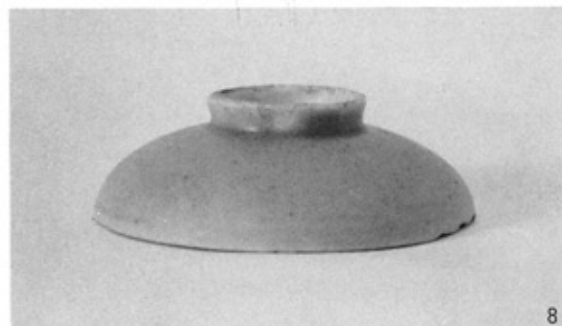
1



6



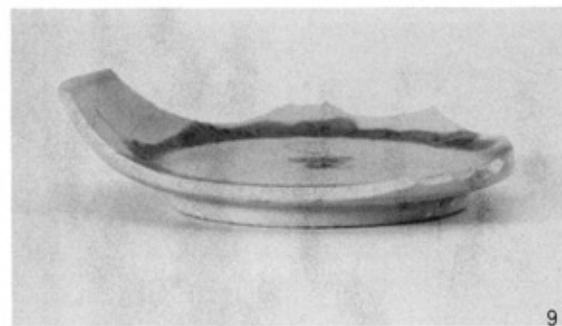
2



8



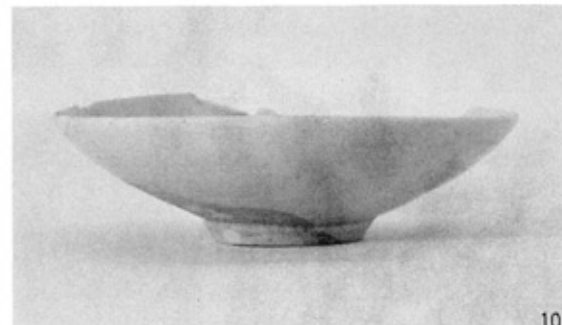
3



9



4



10



5



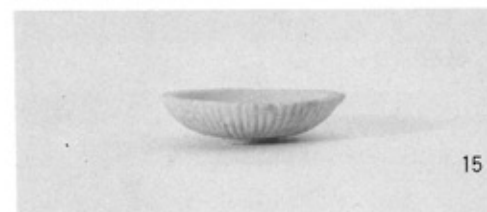
13



7



12



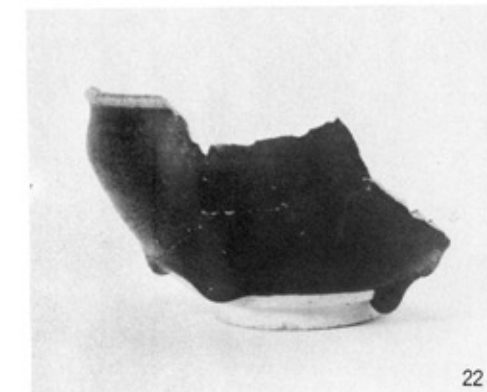
15



16



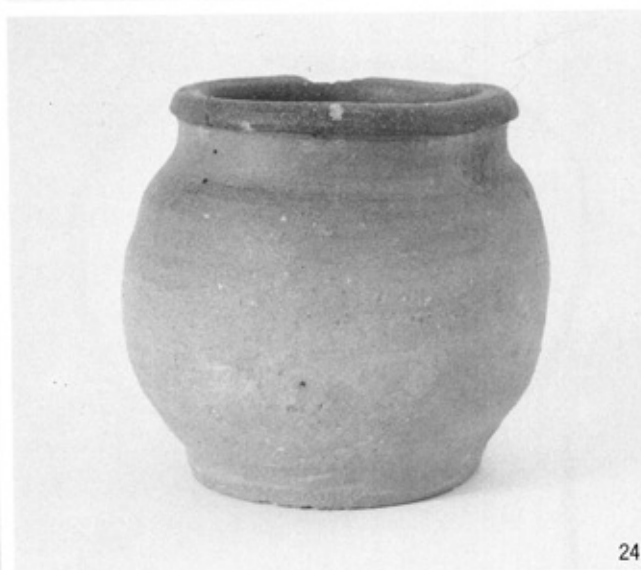
21



22



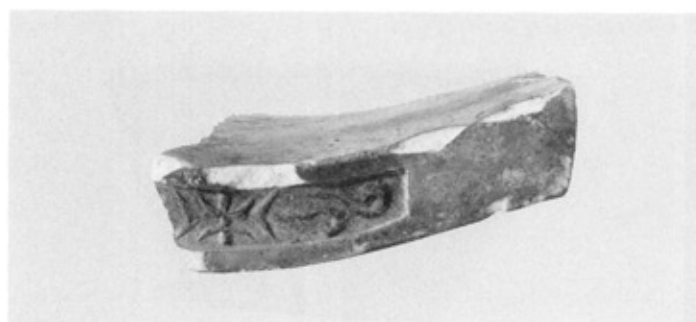
23



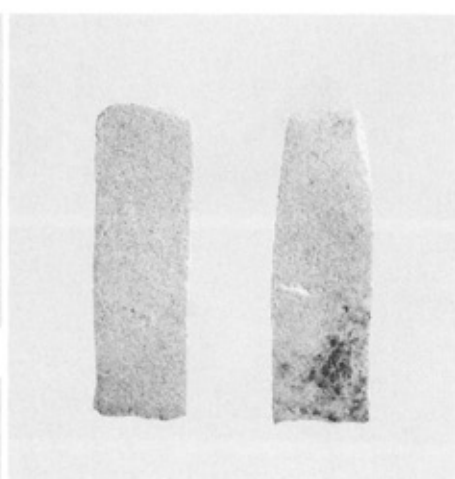
24



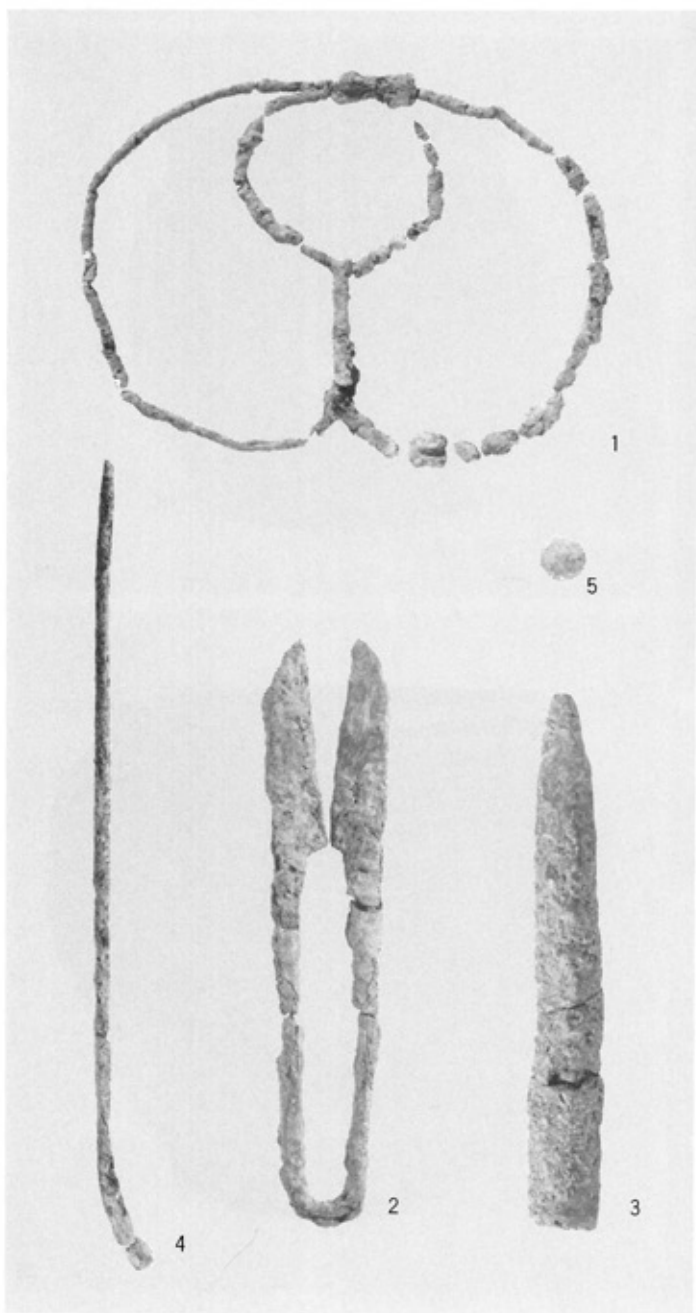
25



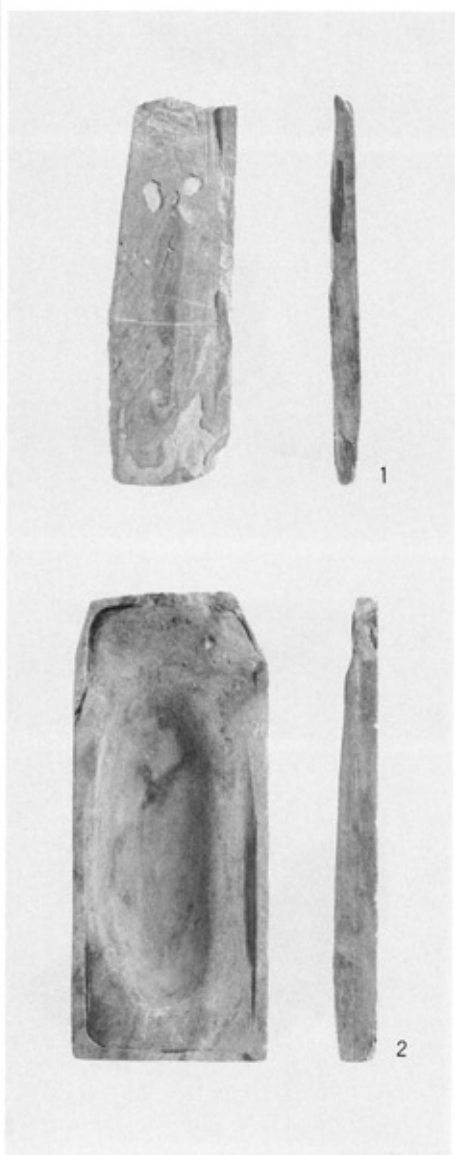
軒平瓦 1/2



砥石 1/2



SX04出土金属製品 1/2



長方硯 1/2

